

ガリシアにおける「石の船」の伝説 : Nosa Senora da Barca (Muxia)

著者	寺尾 江利子
雑誌名	研究論集
巻	73
ページ	117-132
発行年	2001-02
URL	http://doi.org/10.18956/00006370

ガリシアにおける「石の船」の伝説

—Nosa Señora da Barca (Muxía)—

寺尾 江利子

1. はじめに

スペイン、ガリシア地方の巡礼地には、聖人が船で海岸に到着したという伝説を持ったものがある。船といっても普通の船ではない。それらは一様に「石の船 (barca de piedra)」と表現される。テインド Teixido を含め、ガリシアにおいて「石の船」と関わる伝説が伝えられている教会や礼拝堂は、全部で4箇所あり¹⁾、聖ヤコブのように遺体で到着したという話もあれば、他にもない聖母マリアが石の船に乗って、自然が創り上げた神秘的な景観を有する土地に出現したという奇跡譚もある。その聖母が現われた場所は、ムシア Muxía の「船の聖母 Nosa Señora da Barca」という聖地である(ビルシェ・ダ・バルカ Virxe da Barca とも、略してバルカとも言う)。今年(2000年)の9月8日の祭りの日には、新聞「*El Correo Gallego*」でも、8ページに亘って大きく特集記事が組まれた。その中で、人々は口々に「他に類がない」²⁾、「バルカは訪れる価値がある」³⁾、「バルカの祭りはガリシアで最も有名な祭りのひとつ」⁴⁾と祭りへの思いを語っている。初めてムシアを訪れてから3年ほど経つが、今回、はじめて祭りがピークに達する最後の3日間(9月7日～10日)をムシアで過ごし、また8月に訪れたアイルランドでは、ムシアの「石の船」の伝説と極めて似た伝承を持ついくつかの祭礼地についても知る機会を得た。そこで、本稿ではガリシアの民衆に深く根ざすムシアの「船の聖母」を取り上げ、これまでの調査で分かった、この聖地に伝わる儀礼や、豊かな裾がりを見せる「石の船」の伝説の世界、すなわち、ガリシアの民俗的特徴とはどのようなものなのかを考察する。

2. 「船の聖母 (Nosa Señora da Barca)」

ムシアの聖地「船の聖母」は、ア・コルーニャ A Coruña 県、「死の海岸 (Costa da Morte)」と呼ばれる海岸地帯のカマリニャス Camariñas 湾の入り口に突き出たプンタ・ダ・バルカ

Punta da Barca という小さな岬の先端に位置する。そこに建つ礼拝堂に奉られている守護聖母は、サンタ・マリア Santa María (Dulce Nombre de María ともいう) である。礼拝堂は14の小教区⁵⁾から構成されているムシアという自治体 (Concello) の中の同名の1小教区に属している。ムシア自治体の総面積はおよそ121km²、人口は約6500人、人口密度は1km²当たり54人で⁶⁾、コンクルビオン Concurbión 裁判所管轄区に属している。こうした地理的状況のなかでとりわけ目立つのは、何万という巡礼者が集まる教区でありながら、ムシア小教区としての面積は14の小教区のなかで最小の0.51km²しかない点である。

礼拝堂は海からわずか数メートルも離れていない岩の上に建てられている。礼拝堂の傍には、小さな入り江があり、中世には、漁船や商船の停泊地として機能していた。礼拝堂の入り口の前方には、大西洋の荒波がしぶきをあげる。そして、近くには伝説の岩が三つある。それぞれ、聖母が乗ってきた石の船の「帆」、「舵」、「船体」だとされる。その伝説とは次のようである。

キリストの弟子聖ヤコブが、ガリシアの土地の人々を改宗させようと歩いていたとき、ムシアという辺鄙な場所にやって来た。聖ヤコブは、自分の説教に耳を貸そうとせず、信仰心に目覚めない人々に失望し、疲れ果てていた。ある日、聖ヤコブが、海の波に向かって、布教活動を続ける力を与えて下さいと、神に祈りを捧げていると、突然、海が静まり、海上に聖母マリアが乗った石の船が現れた。二人の天使が船の舵を取っていた。聖母は聖ヤコブに元気を与え、エルサレムに帰るよう諭した。そして守護の証しとして、自分の聖像を与えた。そこで聖ヤコブは、岩の下に小さな祭壇を築き、与えられた像を据えた。

さらにこの奇跡から何年もの後、この地の人々が岩の下から聖母像を発見した。そしてその場所に礼拝堂を建設することが決められた。それ以来というもの、数え切れない数の巡礼者が毎年訪れるようになった⁷⁾。

ガリシアの民俗、歴史、神話研究の基礎を築いたマヌエル・ムルギア Manuel Murguía (1833～1923) は、15世紀のサンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼者の多くがムシアまで巡礼の足を延ばしていたことを挙げ、最初にこの「石の船」の伝説が作られたのは、15世紀以降であろうとしている⁸⁾。つまり、15世紀にはすでに巡礼者たちの間では、ムシアが聖ヤコブと関わり深い土地であることが知られていたということになる。しかし、18世紀はじめに、ガリシアの詩人アントニオ・リオボオ・イ・セイシャス Antonio Riobóo y Seixas (1685～1763) によって“*La Barca más prodigiosa*”と題するノベナ Novena⁹⁾の形式による伝説が出版されたことを機に、「石の船」の伝承はより一層注目を集め、全国的に広く知られるようになった¹⁰⁾。

2-1. 「揺れる石 (Pedra de abalar)」

岩のなかで最も大きいのが、聖母が乗ってきた石の船の「帆」だといわれるもので、「帆の石 (Pena valada)」とか、わずかな力で動かせるということから「揺れる石 (Pedra de abalar)」と呼ばれている¹¹⁾。板のような形をした花崗岩で、大きさは、長さ8.7メートル、幅6.91メートル、厚さ30センチほどである¹²⁾。岩は上に乗れば揺れることがある。昔ながらの民間信仰の実践として、巡礼者たちは、自分の悩みが聖母に聞き届けてもらえたかどうかをこの岩に乗って占う。揺らすことができれば、聞き入れてもらえた証拠であるが、人によってはびくともしない。この祈願試しがうまく運ばないと、巡礼は果たされたとは考えられず、こうした民衆の岩に寄せる思いが民謡にも歌われている。

Veño da Virxe da Barca,	Virxe da Barca に行って来た。
Veño de abalar la pedra;	石を揺らしに行って来た。
abalei a máis pequeniña,	小さな石は揺らせたが、
a grande non quixo ela. ¹³⁾	大きな石は動かなかった。 (拙訳)

今回の調査中に知り合った郷土写真家のラモン・カアマーニョ Ramón Caamaño 氏 (92才) は、9月10日のミサまでは、石は固定されたかのように動かないという言い伝えを教えてくれた。事実、10日のミサの日にはこれまでにない数の群衆が「揺れる石」に詰め掛け、ミサ中にも拘わらず、一斉に石の上に乗って揺さぶりつづけたため、初めて地響きを立てて大きくゆらゆらと揺れ動いた (写真①)。ムルギアは、19世紀当時、聖母の日 (9月8日) の翌日に巡礼者たちがこの石の上で踊ると述べているが¹⁴⁾、こうした光景を「踊る」と表現したのだろうか。

また、ムルギアによれば、同様の「揺れる石」が、19世紀当時のガリシアには50個程存在し、「振動する石 (pedras moventes)」、「揺れる石 (pedras abaladoiras)」、「重なり合う石 (pedras cavaladas)」、「重なっている石 (pedras cabaleiradas)」などの名称で親しまれていたという¹⁵⁾。そのうちのひとつ、サマルーゴ Samarugo (Villalba) では、「揺れる石」の足元から青銅器時代の矢尻が二個発見された。そこに矢尻があった理由については明らかにされていないが、「揺れる石」と関連して、何らかの宗教的な目的があったのではないかと考えられている¹⁶⁾。現在のガリシアでは、どれ位の数の「揺れる石」が残っているかについては未調査であるが、*Gran Enciclopedia Galega* によれば、“En Galicia son muy abundantes.” 「ガリシアでは大変多い。」とした上で、現在も残る代表的な8つの「揺れる石」が挙げられている¹⁷⁾。

タボアダ・チビテ Taboada Chivite (1907~1976) によれば、「揺れる石」で妻が不義密通を行っていないとか、罪人であるかどうかを試された時代もあり、石を揺らすことができない者は、密通を犯した、或いは罪人と見なされたという¹⁸⁾。また、密通を犯していないかどう

かを試すということに関して、ムルギアは処女であるか否かを調べるために用いられた「処女の石 (Piedra de la virgen)」という名前で知られているブルターニュの石との関連を指摘している¹⁹⁾が、“Virgen”という言葉自体が「処女」とも、キリスト教の「聖母」とも解釈できる点からして、古代の信仰の上にキリスト教の伝説が取り入れられたことを示しているのではないだろうか。このほか、ホルヘ・ビクトル・スエイロ Jorge-Víctor Sueiro によると、ムシアの漁師たちのあいだでは、石が動く数日後に遭難者が出るとも言われ²⁰⁾、チビテは子宝を願いに訪れる人々もいるとしている。その場合、儀礼として石の回りで踊ることがしばしばあるという²¹⁾。このことから「揺れる石、二人で行って、三人で帰る」「A Pedra de Abalar van dous e venan tres」という諺もある²²⁾。特定の石を揺らして占うという習俗は、ヨーロッパ全土に亘って見受けられるが、その場合、石自体がメンヒールやドルメンといった、有史以前の巨石文化の考古学的な遺跡、遺物であることが多い。ムシアの場合、石そのものの考古学的調査はいまだに行われていないが、1972年に発掘調査が行われ、礼拝堂の南側からキリスト教以前の紀元50年前後の古代ローマ遺跡と、5世紀前後の中世の埋葬遺跡が出ている²³⁾。こうした事実、すなわち文化と文化の重なりは、非キリスト教の居住区が、非常に早い時期に、キリスト教化されたのではないかという疑問を抱かせる。

2-2. 「腰の石 (Pedra dos cadrices)」

聖母が乗ってきた石の船の「船体」部分だと言われる石は、「腰の石 (Pedra dos cadrices)」の名前で知られている。「腰の石」とは、この岩に自然にできた隙間を這ってくぐると、腰痛が治ると昔から信じられてきたことに由来する (写真②)。

これと同じ民間信仰が、アイルランドにも見受けられる。アイルランドの場合、石の多くが、ケルトの集落跡や古い修道院跡の周囲に見受けられる。これらは古い異教の儀礼がキリスト教化された歴史を証明していると考えられている²⁴⁾。

今年のお祭りに集まった巡礼者が教えてくれたのだが、腰痛を治すためには9回繰り返し石をくぐらなければならないという。ムシアに限らず「9」という数字は、ガリシアの民間信仰に根付いている数字である。例えば「9つの波 (nove ondas)」の力を受けるという考え方があり、ポンテペドラ県のア・ランサーダ A Lanzada の海岸で「9つの波」を体を受けると子宝に恵まれるとか、サン・アンドレス・デ・テイシンドという巡礼地に関しても、ロマンセの中で「9つの波」を体を受けて3人の乙女が身を清めるというくだりがある²⁵⁾。これについてムルギアは、「3」という数字が古代ケルトの世界で典礼的、祈禱的意味を持つ数字であったことに由来するとしている²⁶⁾。つまり、聖なる数字「3」を3回繰り返す (= 「9」) ことにより数字の持つ力がより完全なものとなって、悪を浄化すると考えられてきたためだという²⁷⁾。

また、すぐ近くに別の岩がある。それは「舵 (Timón)」と呼ばれ、今は、地面に半分埋ま

ガリシアにおける「石の船」の伝説

っている。それが、聖母が乗ってきた石の船に付いていた「舵」だと伝えられてきた。



写真①「揺れる石」に乗って揺らそうとする巡礼者



写真②「腰の石」をくぐる巡礼者

(2000年9月10日撮影)

3. 歴史的状況

礼拝堂の起源は定かではない。礼拝堂の近くに11世紀頃建設されたサン・シュリアン San Xulián を守護聖者とするベネディクト会のモライメ Moraime 修道院がこの地を管轄下においていたことのみが分かっている。ムシアは、古い地図や文献において、しばしば“Mongfa”もしくは“Mogfa”と記述されるが、この地名の語源は、おそらく関わりの深かったこのモライメ修道院の“monje”（修道士）という単語に由来し、現在の“Muxía”の呼び名は民間でそれが転訛したものだと考えられている²⁸⁾。

現在までのところ、礼拝堂についての歴史資料として最古のものは15世紀のものである。文書は、現在の礼拝堂の前身として存在した「船の礼拝堂 (Capela da Barca)」に関して書かれている。ムシアの主任司祭が、コンポステラ大司教ロペ・デ・メンドーサ Lope de Mendoza に対して、廃墟になっていた「船の礼拝堂」を使えるように建て直すことを条件に、ムシアの教区に合併することを要請したものである²⁹⁾。

16世紀には、皇帝カルロス1世 (1516～1556) がイギリスへ向かう際の船舶地に適しているということで、ムシアの波止場の領有権を要求し、修道士たちに代わりに別の港を与えたが、その後、コンポステラの大司教たちにこの波止場を寄進し、現在に至っている。

17世紀には、コンポステラ大司教もムシアの「揺れる石」や「腰の石」の超自然的な力に関心を寄せ、コンポステラの役僧ヘロニモ・デル・オヨ Jerónimo del Hoyo を巡察員として派遣した。オヨ神父の記録によると、12世紀にイギリス人がサンティアゴ・デ・セレサ Santiago de Sereza (現セレイショ Cereixo) に侵入し、村を破壊した。そのため、難を逃れてモライメ修道院にやって来た人々が、ムシアに民家を建てる許可を修道院に願い出たのがきっかけとなり、ムシアに集落が建設されたという。また、オヨ神父が巡察に訪れた17世紀のムシアには、70名ほどの信者がいたが、モライメ修道院の修道士たちがいた時代には、200名以上の信者を抱えていた³⁰⁾。しかし、神父の記録を裏付ける他の歴史資料は現在までのところ見つからない。

18世紀は、礼拝堂が最も繁栄した時代で、フリヒリアーナ・イ・アギラール Frigiliana y Aguilar 伯爵による寄進で、現在の建物が建築された。先述のリオボオによる“*La Barca más prodigiosa*”が書かれたのもこの時代である。

また、次のような出来事もあった。18世紀ごろから礼拝堂の聖母像の傍に天使が踊っているのが信者によって目撃されることが相次いだため、1724年にコンポステラ司教区の司教代理が、「在サラマンカ神学会 (Ordenes religiosas existentes en Salamanca)」に持ち込み、審議が行われた。その結果、この現象は自然現象とも言えず、また、超自然現象とも言えないとされた³¹⁾。こうした出来事もあり、名の知れ渡った聖母像への信仰は19世紀の間も続き、有名人

や聖職者ばかりでなく、歴史学者や知識人を魅了し、彼等の足を運ばせた。そしてロサリア・デ・カストロ Rosalía de Castro (1837~1885)、ガルシア・ロルカ García Lorca (1898~1936)、ゴンサロ・ロベス・アベンテ Gonzalo López Abente (1878~1963) などの詩人が詩を捧げている³²⁾。

4. キリスト教の聖人伝説としての起源

4-1. アイルランドの「石の船」の伝説

今回、訪れたアイルランドにも、人々から畏敬の念を持って崇拝されている幾つかの石がある。そして伝説では、それらの石に乗って聖人が海を渡って到着したという。例えばウェックスフォード Wexford のカーン Carn 教区にある聖ボエック Boec 教会の守護聖人、聖ボエックは、「石の船」に乗って伝導のためブリテン島まで航海したと伝えられる。「石の船」はブリテン島に着くとトレゲネック Treguenec 教区のペンマーチ Penmarch まで移動したのち、再びアイルランドまで戻った。今でもカーンソー・ポイント Carnsore Point にある聖ボエック教会の傍の海辺にある石がその「石の船」だと言われている。さらに面白いことに「石の船」の一部が、ブリテン島のペンマーチのほうにも残っている。聖ボエック教会の墓地にある石は、古くから「聖ボエックの首」だとも「石の船」の一部だとも言われて崇拝されてきたが、熱が出たときその石に触ると治ると信じられている³³⁾。

ロスコモン Roscommon のキルバリー Kilbarry 教会でも、聖バリー Barry がシャノン Shannon 川を石に乗って川を渡った伝承がある³⁴⁾。この伝説の石は、長い間、近くの湖の側にあったが、近年、教会の庭に移され、その上に聖バリー像が設置されている(写真③)。

聖ブアンドン Buadan も神の加護のもと、「石の船」で航海したとされる。彼は伝導の地スコットランドで処刑の宣告を受け、逃れて海岸にやって来た。そこにあった石に乗ると、驚いたことに海岸は割れ、聖ブアンドンを乗せたままアイルランドのカルダフ Culdaff (Inishowen) まで戻ったという³⁵⁾。

ウォーターフォード Waterford のアードモアー Ardmore の海岸にある聖デクラン Declan の伝説は、とりわけムシアの「船の聖母」のそれに類似している一例であろう。アードモアーの海岸にある巨大な平石は、聖デクランが乗ってきた「石の船」だといわれている(写真④)。この石もまたムシアと同様に、腰の病に効くとされ、7月24日の聖人の日に、平石の下を這ってくぐる民間信仰を伴う³⁶⁾。また、別のバージョンで、「石の船」に乗ってきたのは教会の鐘で、聖デクランはそれを追ってやって来たとするものもある³⁷⁾。

アイルランドには思いのほか「石の船」の伝説が多い。この他、アラン島のキル・エイン Cill Einne にも、「石の船」で到着した 聖エンダ Enda の伝説があるし³⁸⁾、コンネマラ Connemara の東海岸にあるロサ・ミル Ros a' Mhíl にも「聖カラムキルの船 (Saint Colm-Cill's

boat)」と呼ばれる石がある³⁹⁾。



写真③ 「石の船」と聖バリー像
(2000年8月28日撮影)



写真④ 聖デ克蘭の石
(2000年8月26日撮影)

4-2. 聖人伝説としての起源

スペインの聖人伝に立ち返ってみる。アウレリオ・ブルデンシオ・クレメンテ Aurelio Prudencio Clemente (308-404?) は、スペイン、カラオラ Calahorra 出身のキリスト教の詩人で、プリスシリアーノ Prisciliano と同じ時代を生きた人物である⁴⁰⁾。ブルデンシオは、ローマの旅から戻ると、殉教した聖人伝説を自分の詩で褒め称え、広めることに従事した。ブルデンシオの書いた詩のなかのひとつに、308年に処刑されたユーゴスラビアの聖人キリーノ Quirino の伝説がある。キリーノは碾き臼を体に縛られ川に落とされるが、不思議なことに石臼は浮かび、彼を乗せて運んだというものである⁴¹⁾。同様の伝説はもうひとつある。スペインの聖人の一人、ビセンテ・デ・サラゴサ Vicente de Zaragoza 助祭のそれである。彼は、バレンシア Valencia のダシアノ Daciano 総督によって処刑され、のちに聖人になった。残酷な処刑ののち、ダシアノ総督は、ビセンテ助祭の遺体に重い石を縛り付けて、海に投げさせた。しかし石は船のように海に浮かび、遺体を乗せて海岸まで連れて行ったという⁴²⁾。

ブルデンシオが記した上記二つの聖人伝説には、ムシアの聖母や、聖ヤコブの遺体を乗せてパドロン Padrón (語源は Pedrón「大きな石」の意味) の岸に着いた「石の船」の伝説の原型

が、わずかに見出せるのではないだろうか。あるいはブルデンシオの詩が、アイルランドの「石の船」の聖人伝説が出来上がる過程で、何らかの影響を与えた可能性も否定できないのではないだろうか。ブルデンシオは、コンポステーラの聖ヤコブの墓の発見より4世紀も前に生きていた人物であることにも注目したい。つまり、彼の作品は9世紀のはじめには聖職者たちに知れ渡っていたと考えられる。だとすれば、聖ヤコブの墓の発見される以前から、「石の船」をモチーフにした聖人伝説は先行して広がっていた可能性がある。いずれにしても、「石の船」に乗って到着した聖人伝説の背景には、キリスト教のビジョン、すなわち神が住む世界、「天国」や「死の世界」との関連を想起させていることもまた事実である。

しかし、ムシアの聖地「船の聖母」には、石で占ったり、石に祈願するといった古代の様々な石崇拝の名残が見られると結論付けても、伝説で述べられている「石の船」の象徴的意味合いについては、何ら説明できていない。それはキリスト教化の目的で生みだされ、その結果、キリスト教以前の女神が聖母マリアに摩り替えられたことを意味するのかもしれない。或いは、「石の船」そのものが、遙か遠い過去の特別な信仰を表している可能性も考えられる。このなぞを解明するには、石をめぐる儀礼的行為と、ムシアの「石の船」の伝説のように、キリスト教が広めた聖人伝説とをはっきりと区別する必要がある。

ローマ・カトリック教会では、聖母はあらゆる場面で“nave (船)”と喩えられる。例えば「箴言 (31.14)」⁴³⁾において、有能な妻の記述があるが、教会では、これは聖母マリアを説明しているものと解釈している。また、「ローマ・カトリック教会」は“La Nave de San Pedro (サン・ペドロの船)」、教会の身廊も“nave (船)”と呼び、カトリックは組織や聖堂自体を「船」に喩えてきた。つまり、キリスト教の信仰を広める目的で、“nave”は比喩的に用いられてきたのである。ムシアの聖母もまた例外ではない。人生の航海に迷う人々の精神的救済の“nave”に乗って出現したのである。知識人(聖職者)から大衆へと伝えられていく過程で、“nave da Virxe”から“Virxe da nave”に変わり、漁撈や交易などの生活の手段として船が欠かせないムシアのような地域で“barca (小船)”へと変化したとも考えられる。しかし、キリスト教の教えから石をくぐったり、石で占うという儀礼が引き起こされたということとはあり得ない。キリスト教に基づいているという結論を導き出したければ、その場所に聖人や聖母が出現したという伝説を与えるだけで事足りるはずである。たとえ神学的意味で、救済の小船のシンボルとして“nave”が使われているとしても、小船が「石」でできているという伝説との関連を明らかに示すものではない。ましてや聖母がムシアまで「石の船」に乗って、奇跡の航海をして聖ヤコブの前に姿を現すという伝説は、キリスト教の神学的意味として“nave”に与えられている意味とは何ら関係のない、別の伝承の意味があるのではないかと考えられる。

5. 「船」と結びつく「あの世」

では、「船」の象徴的意味を考古学の立場から考えてみるとどうだろうか。

死者を船であの世に送り出すという信仰は、古代エジプト文明にすでに存在した。ギリシア・ローマ神話においても同様に、冥府の川を船で渡す船頭カロンの話はよく知られている。スカンジナビア諸国でも青銅器時代から、あの世への旅路の準備のために墓に船の図柄を彫刻したり、墓を船の形にしたりすることが行われていた。イベリア半島においてもまた、こうした古代信仰が、直接的には古代ローマ人より伝えられていた。1923年、ガリシアにおいてそのことを証明する考古学的発見があった。ビラル・デ・サリア Vilar de Sarria (Lugo) で古代ローマの道標が出土し、それは現在ポンテベドラ博物館が所蔵している。この道標には、死者の航海を表した彫刻が施されており、ガリシアにおいても死者があつた世へ行くために船を用いるという信仰形態があったことを示している。

こうしたキリスト教以前の信仰は、形を変えながらも依然として後の信仰、すなわちキリスト教信仰の奥底に生き続けた。例えば、1136年にイングランドの修道士 Geoffrey of Monmouth によって書かれた、アパロンの島ヘアーサー王の遺体が船で運ばれるという物語があるが、これは12世紀になってもウェールズの民間で根付いていたケルトの神話である。

そしてガリシアと隣接したポルトガル北部でも、つい最近まで死者を埋葬するまえに、「聖ヤコブの船に乗せてもらえるように」といって硬貨を遺体に持たせていた。明らかにこの習俗には、あの世へは船で旅立つという信仰が存在する。これは、ローマ・カトリック教会が、巧みに土着の信仰を聖ヤコブの伝説に入れ替え、それが民衆のカトリックの信仰として浸透していった結果だとも考えられる。そして古代エジプトから20世紀の初めに至るまで、「船」と結びつく「あの世」は大筋において一致している。大洋の西に浮かぶ楽園があるとか、その楽園では病も死もなく、永遠に幸福で時間が存在しないといった類のものである。

6. 船で往来した修道士たち

聖人が「石の船」で航海するという伝説は、先に見てきたように、アイルランドにも見受けられる。そこで、両者に共通する文化と歴史からその精神世界を読み解き、「石の船」の伝説に近づいてみたい。

周知のように、アイルランドのキリスト教は、5世紀頃に最初の修道士たちがブルターニュから到着して以降、ケルトの慣習に根ざして独自の発展を遂げた。その主な特徴のひとつに、禁欲主義的な苦行の実践が挙げられる。その精神は、隠遁生活をおくる修道士たちを、アイルランドの辺鄙な場所ばかりか、カラハ (curraghs) という皮船に乗って、大洋へと向かわせた。彼らの大胆な航海は、アイルランドの修道士たちをスコットランド、コーンウォール、ブルター

ニュの海岸地帯、そしてガリシアへも導いた。これらの地域を結ぶ海上の道は「北欧と南欧を結ぶ史上でいう『琥珀の道』として前1500年から500年の間には確立されていた⁴⁴⁾」道である。「琥珀の道」を通じて、ブルターニュの修道士が皮船でガリシア北部を往来していたことは既に証明されている。572年の第2回ブラガ宗教会議に、ガリシア北部のサンタ・マリア・デ・ブリトニア Santa María de Britonia 教区⁴⁵⁾からブルターニュ人の司教マイロック Mailloc が出席していた。つまり、ガリシア北部にはブルターニュ人修道士が居住していたことになる⁴⁶⁾。だとすれば、ブリトニア教区の修道士のメンバーには、ブルターニュのケルト・キリスト教と密接に関わっていたブリテン島の修道士や、アイルランドの修道士が含まれていたことも推測される。残念ながら、それを裏付ける歴史資料は今のところ発見されていない。だが、マイロック司教の存在から、ガリシアがキリスト教化されてゆく初期の時代においては、ケルト系修道士からの影響が、コンポステーラのヤコブの墓発見よりもずっと早い時代に生じていたことは間違いない。また、ガリシアにおいて彼らケルト系修道士たちの修行精神は、たやすく受け入れられたと考えられる。プリシリアーノは370年頃、キリスト教の1分派を築き、特にガリシアの農村社会で継承されていた。その教義はマニ教、グノーシス主義の流れを汲み、苦行の実践を説いたとされる。プリシリアーノは385年ごろ異端の宣告を受け、処刑されたが、その後も信奉者が多く、572年の第二回ブラガ宗教会議でも問題となっていた⁴⁷⁾。

カロ・オテロ Carro Otero は、サン・ビセンテ・ド・グロベ San Vicente do Grove (Ría de Pontevedra) 教会に、アドロ・ベリーョ Adro Vello 埋葬遺跡を発見した。そこから出土した西ゴートの十字架は、場所の異なるムシアのモライメ修道院の墓地跡から出土した十字架と全く同じ形であった。さらに驚くべきは、これらの十字架と同じものが、ノルマンディーのモン・サン・ミッシェル歴史博物館 (Musée Historique du Mont Saint Michel) にも保存されている⁴⁸⁾。場所の異なるこれらの十字架の存在は、同じケルト系修道院の修道士たちが、海上ルートで往来していたことを証明している。その修道院とは、マイロック司教がいたサンタ・マリア・デ・ブリトニア修道院だとも考えられる。

「石の船」の伝説はケルトの伝承であり、彼らケルト系修道士たちにより、キリスト教を布教する目的で、ムシアや テイシド、さらにはコンポステーラの聖ヤコブの伝説として転用されたとすれば、伝説は容易に受け入れられたのではないだろうか。なぜなら、民間では船である世へ旅するという土着の古い信仰が根深く浸透していたからである。また同時に、海から伝道士がやって来て、キリストの教えを説くという行為は、その歴史、地理的環境からも、何ら不思議なことではなかったと思われる。

おわりに

ムシアの礼拝堂、「船の聖母」に纏わる伝承、儀礼などとともに、その特徴を見てきた。

「石の船」の伝説は、中世のキリスト教のメンタリティーに基づいていることも事実であり、聖人の奇跡を説明していることも間違いない。しかし、石をくぐり抜けたり、石を揺らして占うといった行為は、キリスト教の教えとは無関係な行為である。それは、明らかに精神と肉体の「再生」、石崇拝と関連しており、大衆のあいだに深く根差していたキリスト教以前の信仰が、キリスト教の名の下に取り込まれたものであると言えるだろう。

また、ストラボンやプトレマイオスを始めとする古代の地理学者たちが、ガリシアのフィニステレー Finisterre からテイシドの岬一帯にかけて、太陽を拜む神域、神殿を記している⁴⁹⁾ことから分かるように、古代には、岬の前に広がる西の世界、世界から日の光が奪われ、闇が広がった大洋のどこかに「死者の世界」があるという異界の観念が存在した。これと同じ異界の観念が、「石の船」の伝説からも読み取れはしないだろうか。「石の船」に乗った聖母や聖人は、常に西の方角からやって来る。それはまた、「地下の異界のほかには西の海の彼方の海上異界も信じていたケルトの異界の観念」⁵⁰⁾にも合致している。

さらにガリシアの初期キリスト教会には二つの流れがあったという事実は、ガリシアの複雑な精神世界を理解することを手助けしてくれる。ひとつは聖ヤコブという人物で代表される、ローマ・カトリックの伝統的な流れ、もうひとつは、ブリスシリアーノに代表される、アイルランドやウェールズと関連していたケルト教会の流れである。この二つの流れが合流し、「石の船」の伝説となり、今日も尚、人々の心に生き続けている。そしてロルカの詩のごとく、聖母は海の女神のように、今も礼拝堂の中から荒々しい大西洋の波を見つめ続けている。

Pola testa de Galicia	ガリシアの額から	
Xa ven salaiando a alba.	曙が現われる	
A Virxen mira pra o mar	マリアは聖堂の扉から	
Dende a porta da sua casa. ⁵¹⁾	海を見つめる	(拙訳)
(F. G. Lorca)		



「荘厳ミサ Misa Solemne」に集まった人々

(2000年9月10日撮影)

- 1) ガリシア南部と北部の海岸地帯それぞれ2箇所ずつ分布する。北部は、サンティアゴが遺体で運ばれてきた Padrón の Iria Flavia と、Barbanza 川近く Pobra do Caramiñal。南部は、Muxía と Teixido である。

Alonso Romero, Fernando: *Santos e barcos de pedra*. Vigo. Edicións Xerais de Galicia, S.A., 1991. p.74.

- 2) ムシア年金受給者クラブの会計係、Francisco Lires Sánchez 氏のコメント：“no mundo a Barca non ten outra igual” *El Correo Gallego*. 8 de septiembre de 2000. Muxía. p.7.
- 3) コルーニャ在住、Xosé Luis Vilas Rega 氏のコメント：“a Barca é digna de ser visitada.” *Ibid.*, p.6.
- 4) コルーニャ出身の薬剤師、Begoña Voña Vázquez 女史のコメント：“La Fiesta de la Barca es una de las más populares de Galicia.” *Ibid.*, p.6.
- 5) 14の小教区は、Bardullas, Buiturón, Caberta, Coucieiro, Frixe, Leis, Moraima, Morquintián, Muxía, Nemiña, Nosa Sra. da O, Ozón, Touriñan, Vilastose である。
Fernández Carrera, Xan X. e Ribadulla Porta, Xosé E: *Muxía e o seu Consello*, Muxía, VELOGRAF, S.A. 1992, p.15.
- 6) Fernández Carrera, Xan X. e Ribadulla Porta, Xosé E: *Ibid.*, p.15.
- 7) Alonso Romero, Fernando: *op. cit.*, p.12.
- 8) 1484年の7月、ドイツの Silesia 出身の Nicolás de Poelovo という名前の一人の巡礼者が、サンティアゴ・デ・コンポステーラからムシアまで巡礼を延ばし、「船の聖母」まで徒歩で来ている。おそらく彼は、「船の聖母」と使徒サンティアゴが関わる民間伝承を知っていたためと考えられる。そして帆だったという石を、自分も片手で動かすことができたと言っている。1581年、10月5日には、Erich

Lassota de Steblovo という名前のドイツ人巡礼者もムシアの「船の聖母」まで来ている。

Murguía, Manuel: *Galicia*, Vigo. Edicións Xerais de Galicia, s.a. 1982 (1888). p.85.

- 9) 神、聖人、聖母に捧げる9日間の祈りの祈符書。
- 10) Bouza-Brey Trillo, Fermín: *Etnografía y Folklore de Galicia I*: Edición a cargo de José Luis Bouza Alvarez, Edicións Xerais de Galicia, s.a. 1982. p.207.
- 11) Bouza-Brey Trillo のように「揺れる石」が「船」だとする説もある。
Bouza-Brey Trillo, Fermín: *op. cit.*, p.204.
- 12) Murguía, Manuel: *op. cit.*, p.81.
- 13) Bouza-Brey Trillo, Fermín: *op. cit.*, p.205.
- 14) Murguía, Manuel: *op. cit.*, p.82.
- 15) Murguía, Manuel: *op. cit.*, p.83.
- 16) *Gran Enciclopedia Galega*, V. “abaladoira” pp.43-44.
- 17) 現在も残る代表的な8つの「揺れる石」は、A Pedra da Barca (Muxía), A Pena da Congra (Melide), A Pedra da Fecha (Santiago), A Pena dos Arcos (Ponteareas), A Pena del Castro do Faro (Porríño), A Pedra da Meixide (Viana do Bolo), A Pedra da Paradela (Cambados), A Pedra da Pereiro (Castro de Ouro) である。
Gran Enciclopedia Galega, V. “abaladoira” p.44.
- 18) ポステロ Bostelo (Torono, Culleredo. A Coruña) の山にあった岩で罪試しが行われていた。
Chivite, Taboada: *Ritos y Creencias Gallegas*. A Coruña. Sálvora. 1980, p.168.
- 19) ムルギアは同じような石として、Auvernia の “Mont-la-Cote” を挙げ、緒外国の考古学者によって言及された “pierres branlants” やイギリスの “rocking stones” (イギリスにおいては、“dau-gam” とも呼ばれ、「妊娠の石」という意味合いを持つ) に Barca の石の起源を求めている。Murguía, Manuel. *op. cit.*, p.82.
- 20) Sueiro, Jorge-Víctor., Nieto Rial, Amparo: *Galicia: Romería interminable*. Madrid. Penthalon. 1983. p. 145.
- 21) Chivite, Taboada: *op. cit.*, p.493.
- 22) Chivite, Taboada: *op. cit.*, p.493.
- 23) Sousa, J: *La portada occidental de la igrlesia de San Julián de Moraimo*. Cuadernos de Estudios Gallegos, vol. 99. Santiago de Compostela. 1983. pp.155-178.
- 24) ムシアの「腰の石」は地面と石の間にできた隙間をくぐるが、アイルランドの場合は、石そのものに穴が空いている “Holed Stones” と、隙間をくぐる “Healing Stones” との両方がある。アイルランドの有名な石として、Cloch Liath (Carrow More, Co. Sligo), Cloghfoyle (Tullow, Co. Carlow), Castledermot (Co. Kildare), Larghbryan (Maynooth), Cloch na Peacaib (Kilquhone, Co. Cork), Inishmore (Aran Islands, Monaster Ciarain の側), Inis Cealtra (Loch Derg, 崩壊した Teampul Caimin の側), Kilmalkedar (Co. Kerry) などがある。Loganは、このような石に対しての信仰は、キリスト教

の教義には存在しないことから、キリスト教以前の信仰の名残であるとしている。

Logan, Patrick: *The Holy Wells of Ireland*. Buckinghamshire. Colin Smythe. Gerrards Cross. 1980. pp. 105-107.

- 25) ティンドに伝わるロマンセ『ダマ・ヘルダ』のなかでは、3人の娘がティンドの海岸で「9つの波」を体を受けるといふがある。拙論、「サン・アンドレス・デ・ティンド巡礼と伝承」『説話・伝承学』Vol.8. 2000. p.194.
- 26) Murguía, Manuel: *op. cit.*, p.172.
- 27) ガリシアでは泉においても「9」の力を持つものがある。例えば Sierra de Bendaña にある “Santiago de Nove fontes” (オレンセ県) など。Murguía, Manuel: *op. cit.*, pp.172-173.
- 28) Fernández Carrera, Xan X. e Ribadulla Porta, Xosé E: *op. cit.*, p.35.
- 29) Roa, Luciano: *Opúsculo histórico del Santuario de Nuestra Señora de la Barca*, etcetera. Santiago. Miras, 1864. p.50.
- 30) Cardenal Jerónimo del Hoyo: *Memorias del Arzobispado de Santiago*. Porto e Cia. (1607). pp.372-373.
- 31) Bouza-Brey Trillo, Fermín: *op. cit.*, p.213.
- 32) De Castro, Rosalía: “Nosa Señora da Barca”, *Cantares Gallegos*, Madrid, Catedra, 1984.
García Lorca, Federico: “Romaxe de Nosa Señora da Barca”, “*F. G. L.*” *Obras Completas*. Madrid. Aguilar. 1960.
López Abente, Gonzalo: “Eu quero navegar”, “Miña ofrenda a Virxen da Barca” etc., *Monzade frores bravas para Nosa Señora da Barca*, Real Academia Gallega, ed., A Coruña, 1971. を参照すると良い。
- 33) Logan, Patrick: *op. cit.*, p.103.
- 34) Logan, Patrick: *op. cit.*, p.104.
- 35) Logan, Patrick: *op. cit.*, p.105.
- 36) Logan, Parrick: *op. cit.*, p.80.
- 37) Alonso Romero, Fernando: *op. cit.*, p.18.
- 38) Robinson, Tim: *Stones of Aran: Pilgrimage*. The Lilliput Press. 1986. p.260.
- 39) Robinson, Tim: *Ibid.*, p.191.
- 40) Ortega, Alfonso (Trad.): *Obras Completas de Aurelio Prudencio*. Madrid. Biblioteca de Autores Cristianos. 1981. p.62.
- 41) Ortega, Alfonso (Trad.): *Ibid.*, p.23.
- 42) Ortega, Alfonso (Trad.): *Ibid.*, p.587.
“La piedra, pesada como muela, cual blanca espuma sobrenada. Y la esportilla que tal tesoro guarda, navega por encima de las aguas.”
- 43) 「彼女は商人の船のようになった。遙か遠くからその食物を携えてくる。」
- 44) 大林太良編 小江慶雄「スカンジナビアにおける発掘船について」『日本古代文化の研究 船』社会思想社、1975、p.221.

- 45) A Pastoriza (Lugo) 自治体の1教区である。首席司祭が置かれ、Mondoñedo O Ferrol 教区に属している。サンタ・マリア・デ・ブリトニア教区は、Afoz, Albite, Albites, Arandal, Azougue, Barreiro, Cabaleiros, Cabeira, Campovello, Carballal, Castañeira, Castrillón, Castrillós, Coto, Coto de Francos, Covelo, Currás, Espiñedo, Fitoiro, Fontao, Foxo, Francos, Iglesia, Lodás, Luxilde, Macieira, Mourelle, Obispado, Outeiro, Piñeiros, Seselle, Soledade の32の集落から構成されていた。この教区は旧 Britoniensis 司教座として8世紀まで存在したが、後に Mondoñedo 教区に併合された。教区の特徴としては、ミーニョ川を源流とする小川があちこちに流れていること、廃墟となった原始キリスト教教会や聖堂が残っていることなどが挙げられる。
- 46) Orlandis, J., Lissón, Ramos: *Historia de los concilios de la España romana y visigoda*. Universidad de Navarra. Pamplona. 1986. p.150.
- 47) Braga, Martín de: *Sermón contra las supersticiones rurales*. Texto revisado y traducción de Rosario Jove Clois. EL ALBIR, S.A. Barcelona, 1981. pp.10-11.
- 48) Carro Otero, J.: *Tres esqueletos de la necrópolis galaico-visigótica de San Xiao de Moraimo*. Cuadernos de Estudios Gallegos vol. 101. A Coruña. 1988, p.22.
- 49) ストラボン著、飯尾都人訳『ギリシヤ・ローマ世界地誌1,2』竜溪書舎、1994、
プトレマイオス著、中務哲郎訳『プトレマイオス地理学』東海大学出版会、1986を参照するとよい。
Finisterre の岬は、古代の Nerio であり、この岬では Ara-Solis という祭壇があった。
- 50) 鶴岡真弓 松村一男『図説ケルトの歴史 文化・美術・神話をよむ』東京、河出書房新社、1999、
p.99.
- 51) García Lorca, Federico: *op.cit.*, pp.477-478.